

## 今、ソール・ベローを読む面白さとは：遠藤周作と比較して

|        |   |
|--------|---|
| 著者名(日) | 鈴木 元子   |
| 雑誌名    | 静岡文化芸術大学研究紀要  |
| 巻      | 21  |
| ページ    | 127-134   |
| 発行年    | 2021-03-31  |
| URL    | <a href="http://id.nii.ac.jp/1132/00001640/">http://id.nii.ac.jp/1132/00001640/</a> |



## 今、ソール・ベローを読む面白さとは：遠藤周作と比較して

### Capturing public imagination when reading Saul Bellow in the present: Let's read him with Japanese writer Shusaku Endo

鈴木 元子

文化政策学部 国際文化学科

SUZUKI Motoko

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

ソール・ベローとほぼ同世代の遠藤周作とを比較する。アイデンティティの葛藤、フランス留学、病い、アウシュヴィッツ訪問、弾圧などの観点から論を進めていくと、ソール・ベローの『サムラー氏の惑星』と、遠藤周作の『沈黙』が、両作家のホロコーストへの応答であることがわかる。

Although Saul Bellow and Shusaku Endo seem dissimilar, they have several commonalities: They experienced conflicted religious identity, studied in France, suffered a serious childhood or adolescence illness, and visited Jerusalem and Auschwitz. Furthermore, they have both met Holocaust survivors in Paris, which made an impression on them. A detailed analysis of Bellow's *Mr. Sammler's Planet* and Endo's *Silence* reveals that these works may be a response to the Holocaust. This is similar to Elie Wiesel's *Night* in response to the father who in death called his name.

#### 1. はじめに

数年来研究してきた「ソール・ベローと遠藤周作の比較研究」について、昨年度、成果を2点発信することができた。一つは、2019年8月に彩流社から出版した編著『ソール・ベローともう一人の作家』である。この共著の第9章に、拙論「ソール・ベローと遠藤周作のホロコーストへの応答——『サムラー氏の惑星』と『沈黙』を中心に」が収録された。



二つ目は、同年10月6日に東北学院大学で開催された第58回日本アメリカ文学学会全国大会にて、他に3名の講師と一緒にワークショップを行なったことである。「今、ソール・ベローを読む面白さとは——もう一人ほかの作家と一緒に読んでみる」と題したワークショップである。前述の拙論を深め、核心の部分を中心に据えた内容に変えた。この時は口頭発表であったため、その原稿はまだ手元にあり、公表していない。それゆえ、本稿では、『ソール・ベローともう一人の作家』の収録論文、およびワークショップでの発表を基に、さらにその後の研究を含め報告していく。

#### 2. パリ留学が出発点

ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) はグッゲンハイム・フェローシップ (奨励金) を得ると、妻のアニータと共に1948年9月にパリに渡欧し、約1年余そこに滞在した。翌年の冬にはロンドンへ旅行し、1950年にはオーストリアのザルツブルクで講演を行なうと、その後はイタリアを観光して、同年9月に米国に帰国した。

当時、ベローはユダヤ人でありながらアメリカ市民であるという二重のアイデンティティに苦悩していたのだが、アメリカを離れ、パリという外国に行き初めて自分がアメリカ人であり、それも「シカゴ市民」(Chicagoan) なのだと思えることができたというから不思議なものである。さらには、小説家の卵として小説を書き始めていたのだが、うまくいかず、もやもやとしていたのに、このパリでひらめきを得るとさっそく新しい作品に取りかかった。それが『オーギー・マーチの冒険』(*The Adventures of Augie March*, 1953) であった。また、この点に言及する研究者はほとんどいないのだが、このときユダヤ系パリ市民から、ナチスのもとでどのような生活を送ったのか、フランスの役人たちによる〈駆り集め〉や〈移送〉にどう協力したのかについても話を聞くことができたのであった。

一方、日本の遠藤周作 (1923-1996) についてはどうかというと、1945年に入学した慶應義塾大学文学部仏文科を卒業した後、1950年6月に27歳でフランスに留学し、リヨン・カトリック大学でフランス・現代カトリック文学の研究を始めていた。日本人でありながらキリスト教徒であるという葛藤を抱え込んだまま、フランスで距離感の深まるキリスト教を「身近なものにする」という彼自身の課題から、作家になる決心をしていた。ところが、そんな矢先、1951年末から血痰の出る日が続き、翌年9月には吐血、12月には肺結核と診断されて、ジュルダン病院に入院する羽目になってしまった。

このジュルダン病院については、『遠藤周作文学全集

第六巻 短篇小説Ⅰ』（新潮社、1999年、135-151頁）に、「ジュルダン病院」の題目で短篇小説が収録されている。「ジュルダン病院」の初出は、1956年12月に発行された『別冊文芸春秋』（第55号）であった。ここから、少し引用してみる。

突然、俺は病院の何処かで、おそらく三階の奥の方で烈しい叫び声を耳にした。それは動物が殺される時のような声だった。けれども一瞬の後、その叫びは消え、病院はふたたび、静寂につつまれた。（143）。

「あたり前さ。病院じゃ皆、知っているさ。ダハウの収容所でな、独逸人の医者から黴菌を注射されたのだとよ。まるでモルモットの代りじゃねえか。その男、十年も方々の病院をまわって、もう駄目らしいぜ」（143）。

ここに記されている「ダハウの収容所」とは、ドイツのミュンヘンから北西15kmにある都市ダッハウにあったナチス・ドイツの強制収容所のことである。最も古い強制収容所で、その後でできた収容所のモデルになったといわれている。収容所は収容区域と火葬場の2区間に分かれていたが、32棟の収容区域のうちの1棟は医学実験用のもので、非道な人体実験が行われていたことで知られる。

その眼鏡の一筋の割れ目は、俺の遂に見なかったそのポーランド人が、ナチの兵士に撲られ地べたに倒れた時、割れたもののようであった。（150）。

この短篇小説は、実は遠藤周作自身の体験に基づいている。

伝記的事実としては、1952年12月から翌年1月まで、遠藤はパリのはずれの学生街のあったジュルダン通りのジュルダン学生病院に入院していた。その様子は、「滞仏日記」（1952年9月-1953年1月）に記録されている。そして、1月に退院すると、マルセイユを出立、帰国の途についたのだった。

二人の伝記的事項から、両作家とも同じ頃フランスに勉強に行き、そのことが夫々にとり、人生のターニング・ポイントになったことは間違いない。8歳違いとはいえ、二人とも当時作家の卵で、このときのフランス留学がその後の作家人生を左右するほど多大の影響を与えたのだった。

### 3. 病い

宗教的アイデンティティの葛藤、およびフランス留学に加え、さらに共通していると考えられるのが「病気」である。両者とも「病気」には相当苦しめられ、死と隣り合わせになったことが幾度かあった。ソール・ベローは8歳のとき、腹膜炎と肺炎を併発して、モンリオールのロイヤル・ヴィクトリア病院に半年も入院した。家族と離れ、両親の家を出たのは人生で初めてのことで、どれほど心細く感じたことか。ユダヤ教の家庭礼拝もない、シナゴークに

行くことも、ヘブライ語の学校に行くこともなく、口にすると病院食も家庭とは違った食物だったろう。唯一の慰めは、本を読むことだった。同じく入院していた他の子どもたちが次々と他界していくなか、自分が命を取り留めたことについて、それは特権のようでありながら、なにか〈借り〉ができたような気がして仕方がなかったと述懐している。

Anyone who's faced death at that age is likely to remember something of what I felt—that it was a triumph, that I had gotten away with it. Not only was I ahead of the game. I was privileged. And there was some kind of bookkeeping going on. I did my own mental bookkeeping. I thought I owed something to some entity for the privilege of surviving.

*So there was a debt as well? A debt that had to be paid off?*

A duty that came with survival. Those are the primitive facts.

(...) Overjoyed. Full of welling vitality and perhaps that I've gotten away with something but that it had been by permission of some high authority.

*(It All Adds Up, 289-90)*

その年齢で死に直面したら誰でも、私を感じたように——死に勝利した、と同時に持ち逃げしたんだと——そう思い出すさ。ゲームで優位にあったばかりか、特権を有していたのだ、と。そうして、帳面に記帳するようになった。私は自分のメンタルな帳面に記帳し始めたのだ。生き残るという特権のために、ある存在からいくばくか借りたのだと考えた。

【聞き手】：借金でもあったのですか？ 返さなければならぬ借金が？

生き残れば、おのずと義務も生じてくる。当たり前のことだが。

（中略）大喜びしたよ。活力が沸き出してきて、多分うまく切り抜けられたんだが、高次の権限ある存在の許可がおりたんだという思いでいっぱいになった。

この引用の最後の文には、ベローの信仰のような心情が読みとれる。この病いの後、自分の体は自分で鍛えることを決意したベローであったが、それに比して、遠藤周作は生涯、病気がちであった。

遠藤は1944年21歳のときに、本籍の鳥取県で徴兵検査を受けたが、肋膜炎を起こした後だったため、第一乙種で入隊が一年延期になっていた。この年から咯血して病床にあった堀辰雄を月に一度は訪ねていた。信濃町にあったカトリック学生寮で世話になった舎監の吉満義彦は1945年に結核のため死去している。

1950年にフランスに留学した遠藤は1951年の12月

から血痰が出るようになり、1952年6月スイスとの国境近くのコンブルーの国際療養所で過ごした。9月リヨンで吐血。12月パリで検診を受け、肺に影があることが分かったので、ジュルダン病院に入院して1月に退院、船で帰国の途についたのだった。2月に帰国すると、父の経堂の家に戻るが、それから1年間体調は回復せず、毎週気胸療法に通い、寝ていることが多かった。

1960年37歳のときに肺結核を再発し、翌年3月に3度目の手術を受けることになった。その前日、ある見舞客が持ってきた紙製の「踏絵」を偶然目にしたといわれている。3度目の手術のとき、いつかは危篤状態に陥るも、奇跡的に回復して退院することができた。そして1964年の春、長崎を訪れた遠藤は、大浦で一枚の踏絵に出会う。その木枠には、黒い足指の痕が残っていた。不思議なことに、この踏絵との遭遇がきっかけとなり、結核再発から6年後に、世界的な名著『沈黙』が世に出たのであった。

ずっと健康でアメリカ人にありがちな肥満になることもなく、細身であったベローだが、80歳近くになり、1994年バカンスに出かけたカリブ海の西インド諸島で、魚の毒にあたり、体調を崩した。最初は大した病気ではないと高を括っていたのだが、妻の機転で急遽ボストンに飛び、病院に緊急入院した。心不全と肺炎を併発して、昏睡状態が3週間も続いた。しかし、ベローの作家人生を俯瞰してみると、その経験を通して、親友で同僚のアラン・ブルームが逝去した痛手を乗り越え、心の整理がついたようで、彼を主人公に据えた作品を執筆することができたのではない。自らの臨死体験から6年後の2000年、久々の長篇小説『ラヴェルスタイン』(*Ravelstein*)を世に出すことができた。そして、その5年後には静かに、使命を終えた者のように世を去ったのである。

書簡やインタビュー、エッセー等から判断して、「小説を残すために生かされていた命」とベローも、遠藤も、二人とも身に染みてそう感じていた。

#### 4. アウシュヴィッツ訪問

ソール・ベローがアウシュヴィッツ強制収容所跡を訪れたのは、1960年のことである。人間の毛髪でできたソファや、人間の皮膚でできたランプシェードを見て、ベローは恐怖におののいた。

At Auschwitz, examining the sofas made of human hair and the lamp shades made of human skin, Bellow was seized with “a feeling of terror.” The Holocaust was a glimpse into human nature. Auschwitz was “the history of mankind as it really is, a museum of human history.” (...) “I can’t tell you what an impression Poland makes on me,” he wrote Covici. “It’s too deep. As deep as death, and more familiar than I can admit at the top of my mind. It’s family history.”

(Atlas, 289)

アウシュヴィッツで、人の髪の毛で作られたソ

ファや、人の皮膚で作られたランプのかさを見て、ベローは「恐怖の感覚」に襲われた。ホロコーストで、人間の本性がちらっと見えてしまった。アウシュヴィッツは、「あるがままの人類史で、人類史の博物館」だった。(中略)「ポーランドがどんな印象を私に与えたかなんて、言えない」と彼はコヴィッチに書いた。「深淵すぎる。死のように深い、僕の心の最上部では認識できるほど馴染み深い。ファミリー・ヒストリー（一族の歴史）だから。」

アウシュヴィッツに行った後、ベローは編集者のマーシャル・ベスト(Marshall Best)に宛てた手紙で、“what I saw between Auschwitz and Jerusalem made a change in me. To say the least.” (*Letters*, 193) と筆を走らせている。

一方、遠藤周作に関しては、アウシュヴィッツより先にイスラエルを訪問していた。彼は日本人でありながら、生涯に4度もイスラエルを訪問していた。1度目が1960年1月のことで(ベローがアウシュヴィッツを訪問した年)、当時ヨルダン領だったエルサレムを巡礼したのである。2度目が1969年、3度目が1970年、そして4度目が1972年であった。そして、遠藤のアウシュヴィッツ訪問は1976年になった。

日本の作家では、村松剛(1929-1994)や、開高健(1930-1989)が、1961年4月にアイヒマン裁判がエルサレムで開かれたときに傍聴に行った。村松剛はフランス文学者だが、遠藤周作と共にメタフィジック批評を行なった評論家で、佐伯彰一(1922-2016)もその文学仲間であった。佐伯彰一は後に、ソール・ベローの『雨の王ヘンダソン』を邦訳している。女優の村松英子(1938-)は村松剛の妹で、現在は日本イスラエル親善協会で活躍している。村松剛はイスラエルから帰国すると、翌1962年に角川書店から『ナチズムとユダヤ人』を世に問うた。この書は1972年に文庫化されたが、村松の没後、息子村松聡による解説を加えて、2018年に『新版 ナチズムとユダヤ人 アイヒマンの人間像』(角川新書、株式会社KADOKAWA)として出版されたので、彼のアイヒマン裁判記録は今も読み継がれているのだ。近年、『ハンナ・アーレント』(*Hannah Arendt*, 2012) というドイツ・ルクセンブルク・フランス合作の伝記映画が公開になったので、それでアイヒマン裁判について知った者も少なくないだろう。映画には、アイヒマン裁判を傍聴するアーレントの姿が何度も映っているが、実際には、その場に日本人(村松剛や開高健や犬養道子)もいたのである。

他には、開高健がアウシュヴィッツの衝撃について書いているが、それは「森と骨と人達」で、初出が『新潮』(1962年〈昭和37年〉3月1日、第59巻第3号、126-157頁)で、『七つの短い小説』(1969年〈昭和44年〉3月30日新潮社、65-113頁)や、『開高健全集 第5巻』(1992年、新潮社、53-102頁)にも所収されている。

それゆえ、遠藤周作がアウシュヴィッツ収容所跡を訪れたのは1976年12月のことであったが、日本人作家として一番乗りというわけではなかった。とはいえ、逆に時間があつたからこそ、遠藤はこのときすでに、1956年に出



版されたヴィクトール・フランクルの邦訳『夜と霧』（1946年に出版された原典はドイツ語）を、またロベール・メルル著の『死はわが職業』（*La mort est mon métier*, 1952、村松剛訳）、そしてペーター・ヴァイスの『追究』（原典 1965年）を読んでいた。その証拠に、遠藤の小文は、1956年の『知性』（10月号）に「ヴィクトール・フランクル『夜と霧』」が、そして1964年の『朝日新聞』（10月4日）に「1冊の本——フランクル『夜と霧』」が掲載されていた。

1976年のアウシュヴィッツ訪問については、遠藤の「アウシュヴィッツ収容所を見て」というエッセーが残っている。そこには、彼自身のジュルダン病院で見聞きしたことが織り込まれていた。

私が息をのみながら十号棟の入口を見たのは、この内部でナチの医者たちが少女や双生児など四人たちの肉体にさまざまな菌をうえ、生体実験を試み、殺害したことを読んで記憶があったからである。いや、それだけではない。一九五三年、私は巴里のジュルダン病院に入院したことがあるが、その病院にアウシュヴィッツで菌をうえつけられ、そのため両足の利かなくなった女性がいつも車椅子で廊下を通るのを見たのだった。

（「アウシュヴィッツ収容所を見て」、269）

1976年、アウシュヴィッツ収容所跡で、「ひとつの棟<sup>ブロック</sup>を出るたび私は、N氏のうしろから雪の匂いを吸いこもうとした。棟のなかにはまだ恐怖と死との臭気が充満していて、それを肺から吐き出したかったのである。だが、白雪に覆われた地面も墓場だった」（268）。そうして、ホテルに帰ると、当日履いていた靴を、新聞紙に包んで外に棄てに行った——「恨みと呪いと悲しみのしみこんだ地面にふれた物をそれ以上、身につけられなかったからだ」（270）。

話はそれからまた15年後に飛ぶが、1991年5月18日、米国オハイオ州クリーヴランドにあるイエズス会系のジョン・キャロル大学において、「沈黙と声——遠藤周作の著作」（*Silences and Voices-- The Writings of Shusaku Endo*）と題して、遠藤周作の著作に関する学会が開催されたときのことである。3名のアメリカ人研究者（マイケル・ギャラガー、ヴァン・C・ゲッセル、J・トマス・ライマー）の発表のあと、遠藤周作が記念講演を行ない、次のように述べた。

グリーン氏やモーリヤック氏の方法はこの手品によく似ていると思います。罪もこの二人の作家にとっては、救いの可能性を含んでいるということです。

しかし、私は、彼らよりすこしあとに生まれた小説家です。この前の世界大戦を経験しましたし、また、ヨーロッパ留学のあとアウシュヴィッツに行ったこともあります。アウシュヴィッツへ行っていちばん衝撃的だったことは、今日何千人もの老人や女の人や子どもを殺した人が、夜、音楽会でモーツァルトを楽しむことができたということです。

私は、こういう人を特別の怪物だといまは思っていない。われわれの中に、人間の中に、そういうものが内在しているのだと思います。これは、「罪」というより「悪」です。モーリヤック氏、グリーン氏は「罪」を書きます。しかし、「悪」については、私は〔彼らは〕書いていないと思います。

（『遠藤周作』とShusaku Endo』、81）

この引用のなかで、遠藤は「罪というより悪です」と「悪」という言葉を使っている。そして、グレアム・グリーンも、フランソワ・モーリヤックも「悪」については書いていないと。遠藤のいうこの「悪」とは、実はアメリカユダヤ系作家のソール・ペローのいう「悪」に通ずるものであろう。最後の長篇小説 *Ravelstein*（『ラヴェルスタイン』）には、こうある。

When I mentioned this to Morris Herbst he said, “Well, of course he’ll keep talking things out while there’s a breath in his body left—and for him this is top priority, because it’s connected with the great evil.” I well understood what he meant. The war made it clear that almost everybody agreed that the Jews had no right to live.

That goes straight to your bones.

Other people have some choice of options—their attention is solicited by this issue or that, and being besieged by issues they make their choices according to their inclinations. But for “the chosen” there is no choice. Such a volume of hatred and denial of the right to live has never been heard or felt, and the will that willed their death was confirmed and justified by a vast collective agreement that the world would be improved by their disappearance and their extinction. Rismus, which was Professor Davarr’s word for viciousness, hatred, determination to be rid of this intrusive population in furnaces of mass graves. We needn’t go into this any further.

（*Ravelstein*, 178-79）

このことをモリス・ヘルプストに話すと、彼はこう言うのだった、「ええ、むしろ彼の身体に息が残っている間は、いろいろなことをしゃべりつづけるでしょう——それに、彼にとってはこっちの方が最優先なのです、というのは巨大な悪と関連しているのですから」。モリスが何を言わんとしたか、よく理解していた。あの戦争で明白になったのは、ほとんど誰もがユダヤ人に生存権がないと考えていたことだった。

それは直接、生きるか死ぬかの問題になる。

ほかの民族にはいくつかの選択肢がある——彼らの関心はこの問題やあの問題にいざなわれ、

自らの好みにしたがって選択できる問題ばかりだ。ところが、「選ばれし民」には選択肢がない。あんなに多くの憎悪と生存権の拒否があったとは、これまで一度も聞いたことも感じたこともなかった、そして彼らの死を望んだその意思是、彼らの消滅と絶滅によって世界は良くなるだろうと同意する膨大な集合的合意によって承認され、正当化された。邪悪さや憎悪、侵入者たちを炉や地面に掘った大きな穴のなかに消し去ろうという決定を、ダヴァール教授は「リシュウス」という語で言い表した。さらにこれ以上、我々が深入りする必要はないだろう。

(『ラヴェルスタイン』 鈴木元子訳、233)

まとめると、ベローも遠藤も、強制収容所に閉じ込められた極限状態にある人間の尊厳とは——自由とは、真実とは、悪とは、生と死とは——の問題意識を、作品を書き出す前の、あのパリ留学時代にすでに胚胎していたことになる。

これはソール・ベローにとっては「ファミリー・ヒストリー」(一族の歴史)であっても、遠藤にとってはそうではない。けれども、遠藤がたまたま長崎でキリシタン弾圧という日本の歴史に遭遇したとき、彼の心のなかにすでに苗床は用意されており、同じキリスト教徒として、それは「一族の歴史」になったのである。パリ留学時に入院した病院で出会った人々、そしてそれを発端に読み始めたホロコースト文学により、土は耕されていたのである。つまり、このようには言えないだろうか。彼の『沈黙』は、アウシュヴィッツに代表されるホロコースト、またホロコーストに限らず大量殺戮というものが人類史上に在ったのだ、という認識の下で創作された歴史小説なのである、と。

## 5. 拷問の方法

『沈黙』において、1614年の追放令にもかかわらず、日本を出発せずに潜伏した宣教師37名の一人にフェレイラがいた。日本滞在が23年に及んだ1633年、ついに逮捕されてしまう。拷問を受けること5時間後、フェレイラ神父は棄教する。このときの拷問は、宗門奉行の井上筑後守が最後の手段として採った穴吊りであった。「汚物をつめこんだ穴の中で逆さに」吊るす拷問である(『沈黙』、262)。「汚物を入れた穴の中に、体を縛って逆さに入れる。血が頭に逆流して、その苦痛は始めはゆるやかに、徐々に度をまし最後は言語に絶するものとなる。」(「一枚の踏絵から」、121)

ソール・ベローの『サムラー氏の惑星』にも、同様のシーンが見出せる。主人公サムラーの親戚のウォルター・ブルッフが記憶をたどり、回想して、サムラーに語る場面である。

It led, soon, to Bruch's Buchenwald reminiscences. (...) And then a man fell into the latrine trench. No one was allowed to help him, and he was drowned there while the other prisoners were squatting helpless on the

planks. Yes, suffocated in the feces!

(MSP, 58)

すぐにブルッフのブッヘンヴォルト(ユダヤ人の強制収容所のあった土地)の想い出話につながってゆきもした。(中略) そのうちに一人が便所用の塹壕の中に落込んだ。救い出してやろうにもそれは許されなかったで、ほかの者たちがどうしようもなく板の上にしゃがんで用便しているあいだに、その男は溺れ死んだ。そうなのだ、排泄物の中で窒息したのだ! (橋本福夫訳、47)

この体験は、以後ブルッフのトラウマとなって、生涯まわりつく。死んだ者にとっても、見ていた者にとっても、一種の拷問だったといえるのではないか。汚物による拷問には、栄光に満ちた殉教をさせないよう、人間の尊厳を徹底的に破壊して喪失させる辱めの最たるものという意味合いがあったという。ジョージ・スタイナーの著書『言語と沈黙(上)』によると、「糞尿のなかにゆっくりつけこまれて殺される」(335)という拷問の事例が他にもあったことがわかる。それを両作家は知っていたか、知らずにか、歴史的事実を蒐集して選別すると、見逃すことなく己の作品に採り入れたといえよう。

## 6. 笑いとユーモア、神の沈黙と神の無関心

ベローと遠藤の作品を比較して、前者が暗いテーマを取り扱っている作品でもユーモアやジョークをちりばめているのに対して、遠藤の方は『沈黙』や『海と毒薬』に代表されるシリアスな作品とは全く別個の「狐狸庵先生」としての顔をもっていた。これは大きな差異である。遠藤は狐狸庵先生として、『ぐうたら生活入門』などの「ぐうたら」シリーズや、ユーモア小説を発表していたので、こちらの顔しか知らない読者もいるかもしれない。

宗教に関しては、ベローがユダヤ教徒、そして遠藤がカトリック教徒と、ユダヤ教とキリスト教の違いこそあれ、類似点がないわけではない。遠藤は『沈黙』で「神の沈黙」について書いたのだが、ベローは『サムラー氏の惑星』で「神の無関心」という言葉を使っている。サムラーの口を通して、「辛いのは、神の無関心っていうやつさ」(“Hell was his indifference” MSP, 236)と吐露させているのである。内容的には、人間が困窮しているとき、神のわざが見えないもどかしさについて語られており、遠藤周作の神の沈黙を彷彿とさせる。

## 7. ホロコーストを時空的に拡張して読む

ホロコースト生還者の娘エヴァ・ホフマン(Eva Hoffman, 1945-)は『ニューヨーク・タイムズ』の編集者から作家に転身したポーランド出身のユダヤ人である。彼女は現在イギリスに在住しているが、砕けたガラスの破片という表象から、1938年11月9日に起きた「水晶の夜」と2001年に起きた「9・11」を重ねて読み解こうとした。ホフマンは、次のように事の次第を記している。

It was almost exactly three months after my Jedwabne visit, on September 11, 2001, that the beginning of a new era was announced, as surely as if a giant, glass-shattering gong had been sounded.

For me, as I turned on the television that afternoon in my London flat and stared at the inexplicable images of airplanes crashing into the World Trade Center and the Pentagon, nothing except the date of my confusion was clear: September 1, 1939. (237)

2001年9月11日、私がイエドヴァブネを訪問してちょうど三カ月のちに、ガラスを粉々に砕くかのような轟音とともに新たな時代の到来が告げられた。

その日の午後、ロンドンの家でテレビをつけた私の目に飛び込んできたのは、飛行機が世界貿易センタービルとペンタゴンに突入していく、言葉を失うような光景だった。それは私の中で1939年9月1日〔ドイツ軍のポーランド侵攻〕の光景とぴったり重なり合った。(早川敦子訳、248)

How was one to understand what was happening, how could one analyze causes or gauge possible consequences? If September 11 was not September 1, 1939, was it perhaps November 9, 1938—a Kristall-nacht of a globalized world, with the shattering of glass effected across borders rather than within the country of terror's origin? (239)

何が起きたのかを理解していない者に、どうやってその原因やその後を分析できようか？ 9・11が1939年の9月1日と同じでないとするなら、それは1938年の11月9日だといえるだろうか？ 砕け散ったガラスの破片が恐怖の根源となった国にとどまらず、国境を越えて世界に広がって世界全体を恐怖に陥れることになった、現代のクリスタル・ナハト（水晶の夜）だと。(早川訳、250)

It is not that the two atrocities are comparable in scale or kind. The terrors of terrorism are not like the horrors of the Holocaust. Nevertheless, September 11 was an event of first-order magnitude in that it seemed to signal a fundamental transformation in the arrangements of the world, the manifestation of a fault line whose opening released demons, and whose further opening could tear everything apart. (241)

二つの殺戮が規模からいっても本質からいっても

呼応するものだということを言っているのではない。テロの恐怖とホロコーストとはまったく別だ。にもかかわらず、9・11は、世界の根本的な成り立ちを大きく変えてしまう徴となり、誤った途が拓かれて悪魔が解き放たれ、やがて何もかもがばらばらに粉碎されてしまうような大きな変化がもたらされたという意味において、第一級の大きさをもつ出来事だった。(早川訳、252)

エヴァ・ホフマンのこのような姿勢に触発されて、『サムラー氏の惑星』の読み直しをはかると、ホロコースト以外の大量殺戮や虐殺に関する言説が少なくないことに気づく。たとえば、ラル博士との会話で、H.G.ウェルズの『宇宙戦争』(*The War of the World*, 1898)で火星人が人類を抹殺しにくるのは、ヨーロッパから移住した白人がアメリカ先住民や野牛の群れの絶滅をねらって殺害する様と大差ないと語られる。また、インド・パンジャブ生まれのラル博士が、1947年に起きたヒンズー教徒とイスラム教徒の衝突である、いわゆる「カルカッタ大殺戮」の現場に居合わせたことも語られている。

加えて、サムラーが1967年の「6日戦争」(第三次中東戦争)時に、イスラエルに飛んで目撃した証言も含まれている。彼は新聞記者用のバスでガザに入り、占領直後のガザを歩き回ったのだった。

Driven off ...; and very thick about these machines, the dead. There were dug positions, emplacements, trenches, and in them, too, there were hundreds of corpses. The odor was like damp cardboard. The clothes of the dead, greenish-brown sweaters, tunics, shirts were strained by the swelling, the gases, the fluids. Swollen gigantic arms, legs, roasted in the sun. The dogs ate human roast.

(MSP, 250)

そしてそのまわりにびっしりかたまっている屍体。掘った陣地や、砲床や、塹壕があり、それらの中にも何百人もの屍体があった。臭気はしめった厚紙みtainだった。死者の身につけている青みがかった茶色のセーターや、短い上着や、シャツなどは、屍体の膨張と、ガスと、液体とで、ピンと張りつめていた。いやに大きくふくれ上った腕や脚が陽光の中であぶられていた。その人間の焼肉を犬が食っていた。

(橋本訳、211)

人間の脂の異様な臭気に、サムラーは吐き気を催す。ニューエル神父の指さすロシア製のナパーム弾の痕を見て、サムラーは「これは本物の戦争なのだ。誰もが殺害に敬意を表している」(“It was a real war. Everyone respected killing.” MSP, 251)と思う。戦争に加わっていた者、その青年たちは戦闘が終わると、サッカーをし、本を取り出すと試験勉強をするのだろう。そして、エジプト人たちの腐りかかった屍体の臭気を取り除こうと、海の中に入るサ



ムラー。この箇所からは、アウシュヴィッツを訪れた遠藤がそのとき履いていた靴をホテルの外に棄てに行った、身につけていたくなかったから、という彼の体験が想起される。あたかも両作家とも、「人間であることから解放してくれ！」と叫んでいるかのようである。

## 8. 応えるために書く

この両作家の心情に思いを馳せると、もう一人、『沈黙の叫び』(*The Shriek of Silence: A Phenomenology of the Holocaust Novel*, 1992、末邦訳)の著者デイヴィッド・パターソン(David Patterson, 1948-)の言説を想起せずにはおれない。

And who can forget the dark confession of the boy Eliezer upon the death of his father in Wiesel's *Night*? "His last word was my name," he says. "A summons, to which I did not respond. I did not weep, and it pained me that I could not weep. But I had no more tears. And, in the depths of my being, in the recesses of my weakened conscience, could I have searched it, I might perhaps have found something like—free at last!" (112-13). The son, of course, can know no freedom apart from his response to the father who summons him. The novelist writes in an endeavor to answer the father who in death calls his name.

(Patterson, 67)

ヴィーゼルの『夜』で、父の死について、青年エリエゼルが酷い告白をするのを誰も忘れることはできないだろう。「父の最後の言葉は私の名前でした」と彼は言う。「名前を呼ばれたのに、それに応えようとしなかった。泣けなかった、しかし、泣けなかったことが自分には辛い。けれど、もう涙も枯れ果ててしまっていた。私という存在の深淵において、私の弱った良心において、私がずっと探していたのは、多分「これでようやく自由になった!」というような、何かそんなことを見出したのかもしれない」(112-13頁)。勿論、息子は、彼を呼び出す父に反応すること以外、自由を知ることとはできないのだ。作家は、死の間際に自分の名前を呼ぶ父に応えようとして、物を書くのだ。

パターソンの指摘のように、確かに、エリ・ヴィーゼルは「いまわの際に最後に呼びかけた父に応えなかった自分」の「沈黙」を破り、「応えようとするために書く」のだと述べている。

ソール・ペローの『サムラー氏の惑星』と、遠藤周作の『沈黙』にも、「応えようとするために書く」作家の姿勢と、灰を語る言葉が見受けられる。それは、両書が過去と現在をつなぐ貴い証言であり、かつ西洋と東洋をつなぐ大量殺戮に対する応答のナラティブだからに他ならない。ペ

ローは、「あらゆる人間があらゆる人間を殺害している時にこそ、神聖さを探り求めるべきなのだ」と主張している。共に、アウシュヴィッツを自分の足で訪ねた作家として、語らずにはいられない内なる欲求により促された「書く行為」による応答なのであった。



(アウシュヴィッツ強制収容所跡、2017年8月25日、鈴木元子撮影)

## 参考文献

- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. New York: Random, 2000.  
Bellow, Saul. *Mr. Sammler's Planet*. New York: Viking, 1970.  
(『サムラー氏の惑星』 橋本福夫訳、新潮社、1974年)  
---. *It All Adds Up: From the Dim Past to the Uncertain Future*. Viking, 1994.  
---. *Ravelstein*. New York: Viking, 2000. (『ラヴェルスタイン』 鈴木元子訳、彩流社、2018年)  
---. *Saul Bellow: Letters*. Edited by Benjamin Taylor, Viking, 2010.  
---. "Israel: The Six-Day War." *There Is Simply Too Much to Think About*. Edited by Benjamin Taylor, Viking, 2015.  
Hoffman, Eva. *After Such Knowledge: A Meditation on the Aftermath of the Holocaust*. London: Vintage, 2005. (『記憶を和解のために——第二世代に託されたホロコーストの遺産』 早川敦子訳、みすず書房、2011年)  
Patterson, David. *The Shriek of Silence: A Phenomenology of the Holocaust Novel*. The UP of Kentucky, 1992.  
Wiesel, Elie. *Night*. Translated from the French by Marion Wiesel. New York: Hill and Wang, (1958), 2006.  
ヴァイス、ペーター『追求——アウシュヴィッツの歌』 岩淵達治訳、白水社、1966年。  
ヴィーゼル、エリ『夜』 村上光彦訳、みすず書房、1967年、1995年。  
遠藤周作『ジュルダン病院』『遠藤周作文学全集 第六巻 短篇小説Ⅰ』 新潮社、1999年。  
遠藤周作『一枚の踏絵から』『遠藤周作文学全集 第十三巻』 新潮社、2000年。



遠藤周作「アウシュヴィッツ収容所を見て」『遠藤周作文学全集 第十三巻』新潮社、2000年。

遠藤周作『沈黙』（新潮文庫）新潮社、（1966年）、1981年。

遠藤周作、V・C・ゲッセル他『「遠藤周作」とShusaku Endo』春秋社、1994年。

開高健「森と骨と人達」『開高健全集 第5巻』新潮社、1992年、53-102頁。

開高健「裁きは終りぬ」『声の狩人』岩波書店、1962年、31-70頁。

鈴木元子「ホロコースト、隠れユダヤ教徒、隠れ切支丹——ソール・ペローと遠藤周作の文学」『静岡文化芸術大学研究紀要』（第17巻）、2017年、1-13頁。

鈴木元子「ソール・ペローと遠藤周作のホロコーストへの応答——『サムラー氏の惑星』と『沈黙』を中心に」『ソール・ペローともう一人の作家』彩流社、2019年。

スタイナー、ジョージ『言語と沈黙 上巻』由良君美他訳、せりか書房、1974年。

デッシャー、H・J『水晶の夜——ナチ第三帝国におけるユダヤ人迫害』小岸昭訳、人文書院、1990年。

フランクフル、ヴィクトール・E『夜と霧 新版』池田香代子訳、みすず書房、2002年。

村松剛『新版 ナチズムとユダヤ人 アイヒマンの人間像』KADOKAWA、2018年。

メルル、ロベール『死はわが職業』村松剛訳、大日本雄弁会講談社、1957年。

山根道公『遠藤周作 その人生と「沈黙」の真実』朝文社、2005年。